

斎宮群行の道筋を辿る旅―平成九年三月二十日―

一文字 昭子

斎宮群行の道筋については既に福嶋昭治氏（注1）、所京子氏（注2）の論文があり、また平安京から伊勢神宮へいく古代の道については足利健亮氏（注3）の論文がある。今回の旅行はこれらの諸氏の論文をもとに道筋を推定し、その上で現代の道路を使って効率よく頓宮や史跡を廻るというものであった。案内役として福嶋昭治先生が快諾して下さった。

旅行終了後、機会があったら再びこの道を辿りたいとの希望が多く寄せられたため、地図と対比させながら今回の旅を記録することとした（文中の括弧付き数字は地図中の数字に対応している）。各見出しに付けた時刻は最初に福嶋先生が予定して下さったもので大体、この通りであった。

最初にお断りしておくが、今回の旅行に参加せず、話を聞いて辿ってみようと思われる方は参加者の「大変

良かった」という感想は福嶋先生の明解なる解説に負っていること大であることをご承知おき頂きたい。

斎宮が伊勢へ群行する道については『斎宮寮式』に「凡頓宮者。近江国府。甲賀。垂水。伊勢国鈴鹿。一志。総五所。並国司依例营造。」

と記され、都から五泊六日かけて到着したことがわかる。途中の経路については官道を通っていたと推定されるがその記述は非常に少ない。また一口に平安時代といっても時期により経路には変遷があることから経路そのものには特に重要な意味がなかったことが伺われる。

『日本三代実録』仁和二年（八八六）五月十五日条には

「勅遣左衛門権佐従五位上源朝臣昇。六位一人。検

（注1）「斎王群行の道」園田学園女子大学論文集十二卷（昭和五十三年一月）

（注2）「良子斎王の伊勢群行・覚書」『田中本春記』にみる実況―藝林四十三卷四号 一九九四年十一月

（注3）「平安京から伊勢神宮への古代の道」（『環境文化』第五一号 昭和五十六年）

近江国新通阿須波道之利害。」

とあり、それまで加太越のルートを通っていた群行の道が鈴鹿峠を越える道に移行したことが判る。同年六月二十一日条には斎宮繁子内親王が新道を通って伊勢神宮に向かう旨が伊勢国に通知され、また伊賀国の旧頼宮が停止されることが合わせて明記されている。斎宮繁子内親王は九月二十五日、この新道を通って伊勢へ群行した(注1)。

今回、この仁和二年(八八六)の新道を通る、京都から伊勢まで約百八十キロの道のりをバスを使って一日で辿り、五つの頼宮跡、所在の明確でないものについてはその候補地、及び道筋にある平安時代にゆかりの深い場所をあわせて見学した。

#### 一、内裏から近江国府まで

栗田口(八・四五) 近江国府(一〇・五五)

斎宮の卜定から群行まで洛内で行われる様々な儀式については当時の儀式の記録類によってかなりの概要

(注1) 『三代実録』仁和二年(八八六)九月二十五日条に

「今日巳時。王輿出自近江国垂水頼宮。酉時至伊勢国鈴鹿頼宮。」とある。これによって確かに新道である鈴鹿峠越の道が採られたことがわかる。

(注2) 足利健亮氏説(藤岡謙二郎編『古代日本の交通路I』第一章畿内)

が判っている。群行当日、斎宮は天皇から「別れの御櫛」を額に刺される。天皇は御代の長く続くことを祈って「京乃方仁趣支給不奈」と仰せられ、その後、決して振り返らず、斎宮はそのまま株立つ。

この宮中での儀式を終えた後、京中のどの通りを通って都を出るのかは現在ほとんどわかっていない。ただ『源氏物語』『賢木』巻に

「暗う出でたまひて、二条より洞院の大路を折れたまふほど、二条院の前なれば」

という記述がある。『源氏物語』が多くの箇所事実で即した表現をとっていることは先学の明らかにするところであるので一つの手掛かりとはいえよう。

都から各地へと向かう古代官道の当初の構想はすべて道の羅城門から南五丁で直角に折れて東へ進むというものであったらしい(注2)。そして平安京の外周に沿って北上し、栗田口から山科へ抜けるというものである。しかし地図をみればこのような杓子定規な規定が

早々に崩れ三条通りからそのまま栗田口へ向かうことになったのは理の当然である。また、山科へと向かう峠がどこであったか現時点での確定はされていないが、『日本紀略』天曆三年(九四九)五月二十二日条に栗田山越えの道についての記事が見え、また古代末の紀行文に「栗田口の堀道」との記述があることからここが最有力候補であることは間違いない。そこで我々は三条通りを通って右に都ホテル、左に日本最初の事業用発電所である蹴上発電所を見ながら京阪京津線に沿って山科へと向かった(1)。

京阪京津線九条駅から二百メートルほどいったところに旧東海道があるが現在は山科から京都へ向かう一方通行となっていて通れない。そこを横目で見ながら天智天皇陵の前を通り、東海道線をくぐって卒業式で賑わう京都薬科大学の前を通過した。四ノ宮(2)のところまで左へ進み、そのすぐ先で国道一号線に合流する。このところは多くの道が合流しているため素人目には縫うように道を選んで行くといった感じである。福嶋先生と三重交通のベテラン運転手さんのおかげで難なく通過。峡谷に入り、右手に名物「名水餅」の看板を見る。この少し先に月心寺という非公開

の寺がある。その玄関前に成務天皇(在位一三一—一九〇)が産湯に使ったという「走り井」があるという。

走り井のほどを知らばや逢坂の

関引き越ゆる夕かげの駒

(拾遺和歌集卷第十六、雑春、1108) (注1)

という清原元輔の歌のほか、『蜻蛉日記』や『枕草子』などにもこの「走り井」の名が見え、古くからの名水としてつとに有名である。福嶋先生の流れるような解説を聞きながらバスは順調に逢坂関へと向かう。東海自然歩道逢坂山歩道橋の手前に石碑が建っており、下車して記念撮影(3)。

次に蟬丸神社へと向かう。旧郷社で蟬丸が逢坂山に隠棲したという故事に由来して建てられたものである。

「今は昔、逢坂の関に、往き来の人に物を乞ひて、世を過ぐす物ありけり。一中略一あやしの草の庵をつくりて、薫といふ物かけて、しつらひたりけるを、人の見て、「あはれの住みかのさまや。薫

(注1) 以下、歌に付けられた番号は『新編国歌大観』のものである。但し、本文については適宜、判りやすいものを使用した。

してしつらひたる」など笑ひけるを聞きて、詠める、

世中とはとてもかくてもありぬべし  
宮も蕨屋もはてしなれば

蟬丸となんいひける。」

(『古本説話集』上、新日本古典文学大系)

実は蟬丸神社は下社、少し南西へ登った道路脇に中社、さらに登った京都府との境に近い大谷町に上社と計三社ある。我々は中社を通り過ぎて下社へ寄る。バスを降りて京阪京津線を渡った奥である。ここには「関の清水」跡、重要文化財の時雨灯籠(蟬丸型)、小町塚といった観光ポイントがある。「関の清水」は東海道路本線の逢坂山トンネルを掘ったときに水が枯れてしまったとのことであつた。ここには紀貫之の歌

逢坂の関の清水にかけみえて今やひくらん望月の駒

(拾遺和歌集卷第三、秋、170)

或いは千載和歌集、東三条院詮子の歌

(注1) 詳しくは『古記録の研究』二一九号 続群書類従完成会 昭和四十五年刊  
『関寺縁起』続群書類従 第二十八輯上

あまた度行き逢ふ坂の関水に  
今はかぎりの影ぞかなしき

(卷十七、雑歌、1057)

など多くの歌が残されている。そのまま、少し先の長安寺(5)へと向かう。ここが関寺跡とされる場所である。関寺は万寿二年(一〇二五)、再興中に迦葉仏の化身といわれる牛が出現したといわれ、道長をはじめ、頼通等もその牛の臨終に結縁を結ぶ為に参詣したことが『栄華物語』等に記されている(注1)。その牛の供養塔と言われるものがあり、牛のものらしく高さ三メートル、八角形の基礎石に巨大なつば型の塔身を置き、笠石を乗せたもので説明板によると鎌倉初期の宝塔ということである。この塔の向かいには「獣魂碑」が建てられ、街道で使役された牛馬の霊を弔っている。さて、ここから一直線に琵琶湖まで出、湖岸を走る国道一六一号線(6)に乗る。旧道はその少し手前の「札の辻」(7)と呼ばれるあたりで東へ折れるものと思われる。一六一号線の義仲寺前の交差点から一つ通りを入ったところに義仲寺(8)があり、

ここは昔琵琶湖の小波に洗われる景勝地であつたが現在湖岸の埋め立てにより遠のいておりその面影はない。義仲寺は寄らなかつたが、松尾芭蕉の墓があることでも名が知られている。その先に琵琶湖を大胆に横断する近江大橋が架かっており、これを渡ると時間の節約にはなるが、我々はやはり瀬田唐橋(9)を渡らねばならない。この橋は古来、宇治橋・淀橋と並んで三大名橋とうたわれ、また軍事的にも重要な地であつた。中洲があり、橋を掛けやすい所である。

いささか余談になるが、この唐橋を詠んだ歌を昨年、後藤先生の『俊頼髓脳』の演習で知り、感動したにも関わらずどうしても思い出せず、前日、同行の友人に府立図書館へいつて調べてもらった上、夜遅く到着された後藤先生にも質問し、お騒がせしたという経緯がある。その問題の歌は

みつき物絶えず供ふる東路の

瀬田の長橋音もどろに

(風雅和歌集卷第二十、賀歌、平兼盛、2202)

また、『太平記』二、俊基朝臣再関東下向事には

「駒もどろと踏み鳴らす、勢多の長橋打渡り」

とあり、瀬田唐橋の往来の激しさを駒が駆けていく音に伺うことができる。

現在の橋は交通量の増加に伴って昭和五十四年七月に架け替えられたものであるが、昔の形はそのまま引き継がれている。平安時代のもはもう少し下流であつたようである。

この唐橋を渡り、少し先の二股に分かれるところを左に進む。五百メートル程行くと細い川があり、その川を渡ってすぐに右の細い道に入る。右に建部神社、左に瀬田南小学校がある。そのまま道なりに団地の横を進み(通常バスが通るような道ではない)、左に進んで団地内に強引に入る。突き当たって右、突き当たって左にいくと近江国府跡の広場に出る。平和な団地内にいきなりバスが乗り込み、停車するや、ぞろぞろと人が降りてくるのを小さな子供を遊ばせていたお母さんたちは何事かという面もちでみている(すみません。怪しい者ではありません)。

この近江国府は団地建設のとき、瓦を積み上げた土台跡が見つかり、昭和四十八年三月、史跡指定を受けた。今はいくつかの碑と土台跡の囲みの他は草原となっており、また団地も建てられていて往時の規模はな

い(注1)。しかし我々は遙か昔、斎宮がこの地に來、ここで天皇によって挿された額の櫛を箱におさめたことを知っている(注2)。

ここが京を發つて最初に停泊した場所、瀬田頓宮があった場所である。

『田中本春記』によると後朱雀天皇朝の斎宮であつた良子内親王は長暦二年(一〇三八)九月二十三日、八省院で斎宮發遣の儀を済ませたあと亥時許(午後十時頃)白河を立ち、翌二十四日寅時許(午前四時頃)に勢多頓宮に到着した。この日は終日雨であつたようである。申時(午後四時)勢多を出立して次の甲賀頓宮へ向つたとある。

おそらく生まれて初めて都を離れ、そしてこれから遙か遠くの伊勢へと向かう内親王の胸中はいかなるものであつたか。

## 二、甲賀頓宮

三雲(一一・四〇)着、(一一・二〇)發

(注1) 藤岡謙二郎氏によつて近江国府の規模が方八町であつたことが確認されている。

(『国府』吉川弘文館 昭和四十四年)

(注2) 『江家次第』卷第十二、斎宮群行

「次摂政示曰、件櫛道間猶剩、至頓宮可納給―中略―件櫛、今夜剩之、至瀬多頓宮納宮」

建部神社のところまで戻り、再び国道一号線に乗る。この付近は地形図を見ると、道路に糸里の痕跡が残っている。しかし道幅が狭く確証はないので国道を行く。現代の国道と絡み合うように旧東海道(点線)が走っており、この地が古くから開かれた場所であることがよく分かる。また草津二丁目から大路二丁目に至る間を流れている草津川は典型的な天井川である。バスはこの草津川の下、草津川隧道(一三)をくぐる。そして江戸初期からの草津名物、焼ヶ餅の店の前を通る。時間都合上、ここで焼ヶ餅を買っている暇はない。残念である。小柿、上鉤。この先で彦根方面へ向かう旧東山道と野洲川に沿つて水口へ向かう東海道に分かれる(一四)。水口へ向かう。大橋、高野、林、右手が旧東海道(点線)である。林を過ぎてすぐのところに伊勢落(一五)と呼ばれる場所がある。ここは昔、伊勢大路村と称し、古くから伊勢へ向かう道であつたと推定されている。伊勢落の向かい、野洲川の対岸に見える山が三上山。名前の通り頂上が三つに分かれている。

あさばらけ空にみかみの山みえて

霧立ちわたる瀬田の長橋

(夫木和歌抄卷第二十一雜部、権大納言長雅卿、9504)

この三上山の北東にそびえる標高三八四、六メートルの山が古来、歌枕として名高い鏡山である。

かがみ山いざたちより見てゆかむ

としへぬる身は 老いやしぬると

(古今和歌集序)

行く月のかがみの山やふけぬらん

音澄みわたる瀬田の長橋

(夫木和歌抄卷第二十一雜部、能因法師、9503)

野洲川橋をくぐると少し混みはじめる。いつも混んでいるという。この右手に五軒茶屋(一六)というところがあり、その道が山の中であるにも関わらず守山市

と石部町の道と直線でつながるところが興味深い。石部町から柑子袋にさしかかる右手の山には赤松の突然変異種であるウツクシマツの自生地がある。そのそばには関西の有名な種苗会社タキイの研究農場がある。園芸ファンには気になる場所である。その先に三雲ドライブインがあり、休憩。昼食をとる。積んでいったお弁当は奮発して豪華なものにしたが、三重交通の運転手さんとガイドさんが朝、五十鈴川から汲んできて下さった水で入れて頂いたお茶がひときわおいしかった。

さて、二泊目の甲賀頓宮であるが、その位置は現在不明である。様々な説が出されているが(注1)、福岡先生はJR草津線の三雲駅から旧東海道を西へ、野洲川にそぐ荒川の上流五百メートル程の所にある勅使野(一七)を挙げている。現在「チョーシノ」と呼ばれるその場所は往昔、貴人の宿つた所という。勢多頓宮、垂水頓宮の丁度中間に当たり可能性は高い。

(注1) 現在考えられているのは

水口付近(『近江輿地誌略』『滋賀県史』)

甲賀郡甲西町菩提寺にある村社、斎神社(『滋賀県の歴史散歩』)

滋賀県高等学校歴史散歩研究会編・山川出版社・昭和五十一年九月)

石部、又は三雲あたり(大西源一氏)

### 三、垂水頓宮まで

垂水頓宮（一三・〇〇）

三雲ドライブインを出て野洲川を横田橋で横切り対岸に出る。国道一号線を東へ東へと進んでいく。旧東海道（点線）はずっとこの辺り右手に見えている。全行程を旧道を辿る場合、二泊三日程みて置いた方がよいとのことであった。今更ながら福嶋先生が案内して下さり本当に良かったと思う。地図だけでこのバス旅行を計画した時は全部旧道を通るつもりであった。無知とは恐ろしいものである。実行していたら今頃は旧道のどこかで立ち往生していたことであろう。

水口の城下町を通り、近江鉄道本線を横切って行く。今宿、徳原と通り、頓宮につく。一号線の左手、茶畑の奥に杉林がある。ここが三泊目の垂水頓宮跡である。近くには野洲川が流れ、斎宮が楔ぎをしたと思われる。道路右側に丁度都合良くお休みの店がありそこにバスを停めさせて頂く。

道路を横切って頓宮跡に行く。杉林が何か神聖な場所という雰囲気を感じ出しているが、この杉はどうみても樹齢が若くここ三、四十年前に植えられたものである。古来、この一角は土地の人々の間で決して鉄を入れたりはしないとされてきた場所で、発掘調査した

訳ではないがここが垂水頓宮であったことはまず間違いないとのことであった。昭和十一年一月、滋賀県知事により史跡の仮指定を受け、現在、伊勢神宮の古材を使って小さな社が作られている。この社裏には井戸の跡と云われるくぼみがあり、ごみ穴と間違われたいためか柵に注連縄が張って囲んである。裏手の奥には地面が僅かに盛り上がった所があり、土塁跡ではないかと考えられている。

この頓宮は『田中本春記』によると黒木で作られた立派なもので、食事や準備も整ったものだったようである。しかし藤原資房が良子内親王の群行に従った帰途、「近辺所為」による放火のため、焼け落ちていたことを記している。余談になるが、この先の土山町にある常明寺には森鷗外の祖父の墓がある。

### 四、鈴鹿頓宮まで

関町（一三・四五）

再びバスに乗り、鈴鹿峠に向かう。登りは緩やかで、平安時代に天下三関と称されるところに、盗賊の跋扈したという話からイメージしていたものとはおよそ違う。傾斜角は〇・二度（二〇）。但し三重県側は急で平安時代、ここに関が設けられたのは京都を攻めるには難く、守るには易かったためという。関東に在住する

者はいささか複雑な気分である。鈴鹿トンネル（20）をくぐる手前に峠の頂上（標高三四九・六メートル）があり、巨大な石の灯ろうが立っている。

「万人講常夜燈」と言い、約二七〇年前に四国金比羅神社の常夜燈として建てられ、ここを往来する行人商人信者が火を灯し、鈴鹿峠より伊勢の海遥か彼方の四国金比羅神社に航海と道中の安全を祈願したものという。山のただ中に金比羅神社の灯ろうとは思議な気もするが、信仰の力の大きさをこの灯ろうにみる思いがする。この灯ろうの脇を通る東海自然歩道が旧東海道（点線）である。

鈴鹿トンネルの手前から蛇行する登り道となだらかな曲線を描く下り道に分岐する。地図で調べたときここに二本の道があるので蛇行したほうが旧道かと思っていたがそうではなかったのである。蛇行しないと登りはきつくとトラック等が登れないためとのことである。ゆめ地図のみで団体旅行を計画するものではない。トンネルをくぐって六、七メートル程いったところに片山神社（21）がある。一説にはここが鈴鹿頓宮跡といわれるが福嶋先生はここでは楔ぎをする水がないこと、また『三代実録』仁和二年（八八九）九月三十日

に繁子内親王が宿泊した際、鈴鹿頓宮の西の垣外の「借屋」から出火し、頓宮が焼けたため繁子内親王が避難した記事があるがここは狭隘でとても頓宮が営まれる規模があったとは考えられないことから疑問視しておられる。そして鈴鹿頓宮はこの峠を降りた麓の関町であろうとされている。

バスは早春の山道を快適に走る。両側には所々に梅が桃が咲きのどかな山里である。番掛の辺りで二本に分かれていた道が合流する。更に下った辺りから左手をみたところが筆捨山である（22）。昔、狩野元信

（注1）がこの山を描こうとしたが雲烟去来、姿態百変して描くことができず筆を捨てて嘆いたことからこの名がついたという。わが友人は実際は鈴鹿峠を越えてきて疲れ果てていたためにはや絵を描く気力も体力もなく、描けなかったに違いないと解釈している。案外真実はそんなところではないだろうか。この山は一名、岩根山というらしく、平安時代にはもちろんのこと元信の逸話もなく、ただの鈴鹿の山々の一つであったのであろう。この山が特に感銘を与える様を見せなかったことも私が友人の解釈を支持する理由の一つで

（注1）狩野元信（一四七六—一五五九）室町時代の画家。正信の長男で、足利將軍に仕え、狩野派の基礎を築いた。

ある。

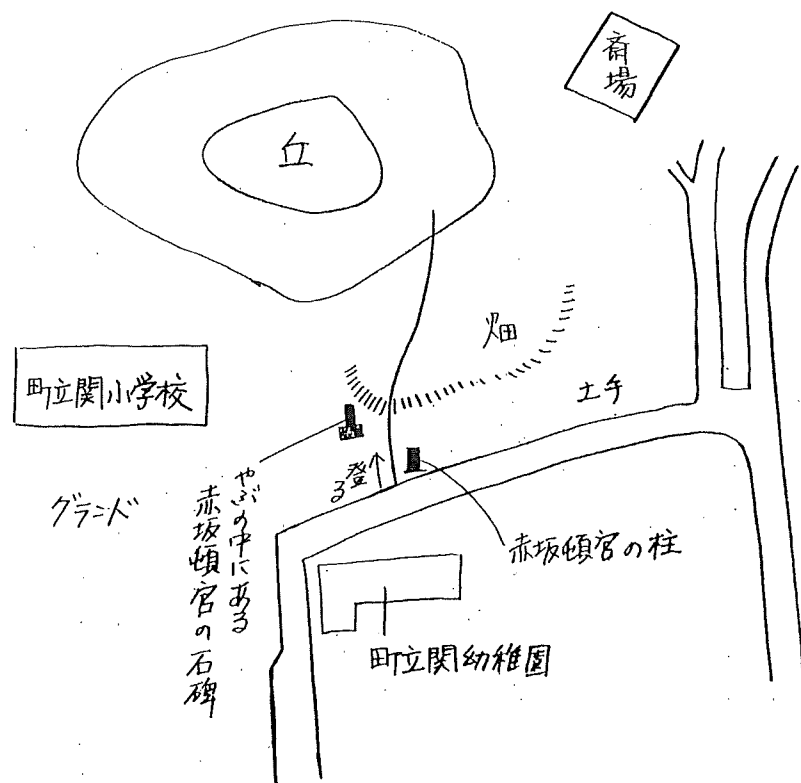
麓、関町には赤坂頓宮跡(23)がある。『春記』において、藤原資房は鈴鹿峠を三重県側から越える様子を、鈴鹿頓宮を卯の刻に立ち、同じ卯の刻に山にかかり、巳の刻に出たというように書いている(注1)。そして『伊勢勅使部類記』の勅使の宿泊地として

#### 「十一日関」

と言う記述がある。赤坂頓宮は天平十二年(七四〇)十一月十四日、聖武天皇の行幸の折の宮跡と伝えられる場所であるが、近くに姫御前と称する場所もあり、福嶋先生はこの辺りが斎宮の宿泊した鈴鹿頓宮であろうとされている。赤坂頓宮跡の碑が立っている場所は地図でみるといたってはつきりと場所が記されている。しかしここは福嶋先生の案内がなければ十中八九、辿りつくことはできなかったであろう。

まず、国道一号線を木崎町、小野と通り、小野川という小さい川の手前で細い道を左に折れる。バスが通るかというような道を進んでいく。案の定、付近の農家の人と思われる人物が不審そうな面もちで我々をみている。第一この道にバスが乗り込んでいくこと自体迷惑千万という感じである。今更バスが縮むわけでもないが気持ち体を小さくして進む。八百メートルほど

(注1) 同時(卯時) 許令立鈴香給 同入此山口 巳時許出此山 三時超畢山也 午時許着垂氷頓宮。



の所に橋がかかっているのので渡る。道なりに進むと五又路にでる。すぐ左隣の道に入り、また橋を渡る。最初の分岐点を右に折れる。

さて、ここでバスを降りるのであるが、見渡す限り平凡な田園風景でそれらしきものはない。まず町営斎場を目指し、そのそばの町立関幼稚園まで辿りつけばその前に「赤坂頓宮跡道」という石柱が建っている。その奥の畑の中の小道を林に向かって登ってゆくと藪の中に「赤坂頓宮跡」という石碑が建っている。地元の人でも知っているかどうかあやしいものである。

#### 五、一志頓宮まで

勅使塚(一四・五〇)

木崎町の分岐点まで引き返し、加太川に架かる勧進橋を渡る。対岸が古厩(ふるま)である。古厩という地名は鈴鹿駅が駅制の存続期間中すでに「古い」駅になっってしまったからではないかと考えられている。平安時代前期、仁和二年(八八六)までは、都から鈴鹿駅にいたる駅路は鈴鹿川上流部の加太川に沿って、柘植と鈴鹿を結ぶルートであった。このことは足利健亮氏の「平安京から伊勢神宮への古代の道」(注1)に詳しい。この道が鈴鹿峠越えにとって替わられたのは都が奈良から京都に移ったこともさることながら、現代の高速道路すら川筋を通し得なかった険峻さにある。

(注1) 「環境文化」第五一号—第四章—

この古厩には現在、お厩の松と碑が建っており、またその前に旧道が残っているが、往時の姿はただ脳裏に想像するのみである。また樹齢四〇七年を誇った松も松喰虫によって枯れてしまったという。昭和五十九年一月に二世が植栽され現在に至る。

ここからいよいよ伊勢へ向かって南下する。旅行前に一番ルートの設定に頭を悩ましたのがここから伊勢への道であった。というものはつきりとこの道であると述べた論文がないのである。安濃川の東岸を通ったのか、西岸を通ったのかもわからない。『江家次第』の伊勢公卿勅使の通った道を示す箇所に

「渡安濃川三瀬」

とあって三回安濃川を渡るらしいがどこが渡河点かは不明である。足利氏の論文は詳細であるが、駅の位置とそれを結ぶ直線の想定路である。したがって次の一志頓宮までは一気に伊勢自動車道を使うこととした。とはいえ、この伊勢自動車道は部分的には古代の道と想定される所を通っているの、あながち安易な選択というわけではない。

関ジャンクションから伊勢自動車道に乗り、バスは快適に進んでゆく。窓を切る風の音も心地よい。思えば無謀にして杜撰な計画も、後藤先生が福嶋先生に案

内を依頼して下さったおかげで一転して有意義なものとなった。これで今年の運を使い果たしたとしても悔いはない。神様にする次なるお願いは来年にまわせばよいのである。芸濃インターチェンジの少し手前にヤマギンズムという新興宗教の大農場がある。その少し先で伊勢別街道（点線）の上を横切る。この別街道沿いには古墳や上代からの寺などが散在し、別に機会にたどってみたいところである。安濃サービスエリア、津インターチェンジを過ぎると安濃川を渡る高架橋にさしかかる。この橋を渡ってから右手が殿村という場所である。ここから山あいになりさしかかる。この出口付近が石川垣内。この部分、足利健亮氏が想定する古代ルートではないかと思われる所である。久居インターチェンジで降りる。バスの通行料金は千円であった。料金を出てすぐに左折し、一六五号線に乗る。道を東進し、二十三号線に突き当たったところ（50）で右折し、南下する。右手に旧伊勢街道（点線）が走っている。また左手の海寄りの土地は古くからの干拓地である。雲出大橋を渡り、四キロ程進むと三雲町役場（50）が左手にある。ここが曾原でこの交差点を右に直角に曲がり、突き当たりまで進む。この突き当た

〔注1〕『雅実公記』嘉承二年（一一〇七）二月十五日条  
『中右記』永久二年（一一一四）二月一日および二日条

ったところを左右に通る道が旧伊勢街道（点線）である。ここでバスを降りる。脇を（どぶ）川が流れている。そのほとりに一志駅の石柱（57）が建っているがこれは結構新しいものと思われる。ここは一志駅の一つの有力な候補地の一つであって、まだ確定したわけではない。但し、一志駅は時代とともに山よりの地から海寄りに移動していったものと考えられ、一一〇〇年頃には海に近い地にあったことが『雅実公記』や『中右記』の記事から判っている（注1）。

来た道を少し戻ると「三雲村指定 勅使塚」という石柱があり後ろに灯ろうが建っている。正面奥に大きな「勅使塚」という碑がある。民家のただ中であり、庭ではないかと思われるようなところである。三雲町教育委員会の説明板によると、養和元年（一一八一）源氏追討祈願の密勅使として伊勢神宮参拝の道すがら、壱志駅の宿舎でにわかに卒去した大中臣定隆を埋葬した遺跡ということである。この死は『吾妻鏡』では、源氏を追討しようとしたための神罰であると解釈された。中世において、この頓死は重要な意味を付与され見逃すことのできない大事件であったとの説明を

麻原先生より受ける。そうした説明を聞いてからこの大きな碑をみるとそれはもはやただの碑ではなくなる。遠い中世初期、激動の時代からの事件を忘れさせまいとするかのような圧力を感じる。神祇少副、従四位下という吹けば飛ぶような身分の一官僚の死が時の意志によって重要な意味を持たされる。その埋葬の地は土地の人々によって語り継がれて現在に至る。中世は沈黙した過去ではなくなり、連綿とつながる活きた時代となって蘇る。

#### 六、忘れ井、斎宮、隆子女王墓、離宮院そして伊勢

忘れ井（一五・一〇）、隆子女王墓（一五・三五）、  
離宮院（一六・五〇）、宇治山田（一七・二〇）

さて、再び二十三号線に戻り、南下する。三渡川を渡る少し手前で二十三号線をそれて我々は直進する。今度は四十二号線である。渡ったところは古市場、右手が市場である。ここに忘れ井という史跡がある（58）。千載和歌集に斎宮喜子内親王の群行に随行した女房、甲斐が忘れ井という所で詠んだという歌で有名な場所である。但し、忘れ井にも幾つかの候補地があり、ここはその内の一つである（注1）。

わかれ行くみやこの方の恋しきに  
いざむすび見ん忘井の水

（巻第十八 羈旅歌、斎宮甲斐、507）

喜子内親王の群行は仁平三年（一一五三）九月であるから甲斐がここでこの歌を詠んだ可能性は高い。この場所には非常にわかりにくく、何度か来ている人でもすぐには行き着けないところである。三渡川を渡った後、最初の交差点で右へ曲がる。栄枯盛衰の激しい現在、いつまで手掛かりになるかは不明であるがトヨタオー ト三重松阪営業所とドライブイン米の庄食堂の間の道である。道なりにまっすぐ進んでいく。一五〇メートル程は直線であるが、あとは狭い少しくねった道である。乗用車ならそのままですすめる。三〇〇メートルばかり先の右手にある。三雲町教育委員会の説明板と数本の松がある。忘れ井の斜め後ろに山神の小さな祠がありその配置図は『伊勢参宮名所図絵』のものと一致する。少なくとも江戸期からの名所であることは間違いない。また、もし迷って付近の人に尋ねるような時には米の庄神社の参道の入り口の前を通るので、この神社を尋ねると良いと思う。

〔注1〕一志郡嬉野町宮古（近鉄伊勢中川駅改札側右手一帯）等



四十二号線に戻り、再び道なりに南下する。この辺りからやや東へと曲がつていく。松坂市を通る。ここには本居宣長宅跡とその墓（樹敬寺）などがある。市街中心地の反対側に駅部田町（まのへら）というところがあり、足利健亮氏はここを飯高駅に比定している。バスは金剛川を渡り、やがて近鉄山田線を越え、櫛田川にかかる櫛田橋（38）を渡る。此の川で斎宮は襷ぎをしている。櫛田橋を渡って堤防を越えたすぐ左横の細い道に入る。旧道で往時の街道の面影をよく残している。ここから斎宮跡と隆子女王墓へ向かう。斎宮の史跡（30）は竹神社の所を左に曲がり、近鉄山田線を越え、最初の四つ角で左に曲がる。突き当たり横が駐車場となっており、ここから入ると裏から行くことになる。近鉄山田線の斎宮駅からいけば正面から入れる。斎宮についてはここでは詳しく説明はしない。ここは昭和四十四年に被川沿岸の古里地区における大規模住宅地造成に伴う事前発掘調査の際に明らかになった。斎宮はその制度が廃絶されてからはこの地の人々に斎王の森として伝承されてきたに過ぎなかった。しかしそれが発掘により実証され、その規模が実に東西約二キロ、南北約七〇メートル、面積にして一三七ヘクタールにも及ぶ広大な宮跡であることが判明したのである。発掘は現在も続けられ、また斎宮博物館もあり、その立体的な展示はわかりやすくおもしろい。あたりは史跡公

園となっており、その広さを実感できる。竹神社から北上した道まで戻り、更に北上し、最初の四つ角で右折する。五〇〇メートル程先に明和町役場（32）があるさらに五〇〇メートル弱進み、左折。六〇〇メートル程先にこんもりとした木立が見える。そこが隆子女王の墓（33）である。醍醐天皇皇子章明親王の娘で、母は藤原敦敏女である。安和二年（九六九）十一月に斎宮に卜定され、天禄二年（九七一）九月群行。天延二年（九七四）閏十月に疱瘡によりこの地で没した。

隆子女王の死は文学史上においては非常に重要な意味をもっている。隆子女王の病死によって後任に卜定されたのが親子内親王であり、その母徽子女王は娘と共に伊勢に下向した。これが『源氏物語』の六条御息所が娘、斎宮とともに伊勢へ下るといふ設定の下敷きになっているといわれている。

隆子女王墓の周りは墓地になっており、広場にちいさな墓石が境も判然としないまま置かれている。中にはかなり古いと思われるものもある。いわゆる我々が見慣れた墓地とはかなり趣を異にしており「あの世」に通じる場所という印象を強く受ける。時は黄昏、団体で来たのが何故か心強い。

さて、後は離宮院を通過して伊勢神宮へと向かうのみである。列車の時刻もあり、離宮院はバスの中から

見るだけということにした。この後の道はバスの運転手さんにお任せである。もはや斎宮が群行で辿った道ではない。バスは一度北上し、二十三号線にのる。笹笛川を渡ると左手に大淀（36）がある。この港から在原業平が尾張へ発ったという。大堀川を渡ってすぐ右折し、柏町を通り、野村町から明野へと向かう。地元民に詳しいドライバーの知る通の道らしい。田圃のただ中の道である。やがて近鉄山田線が見え、明野駅の少し手前で踏切を横断する。名物「へんば餅」の本店の前を通過。ここでも残念であるが止まっている時間がない。今回の旅は名物には無縁である。道なりに進み小俣町役場（34）の前を通る。郵便局の手前で左折。宮川駅の前を通ってJR参宮線を一度横断し、すぐに左折。宮川駅の反対側にでる。そこから参宮線に沿って東に進むと右手にある林が離宮院跡である。夕闇が迫っておりバスの中から林を眺める。時間がなく下車できないのが残念であるが、楽しみは次回にとっておくと思えば良い。

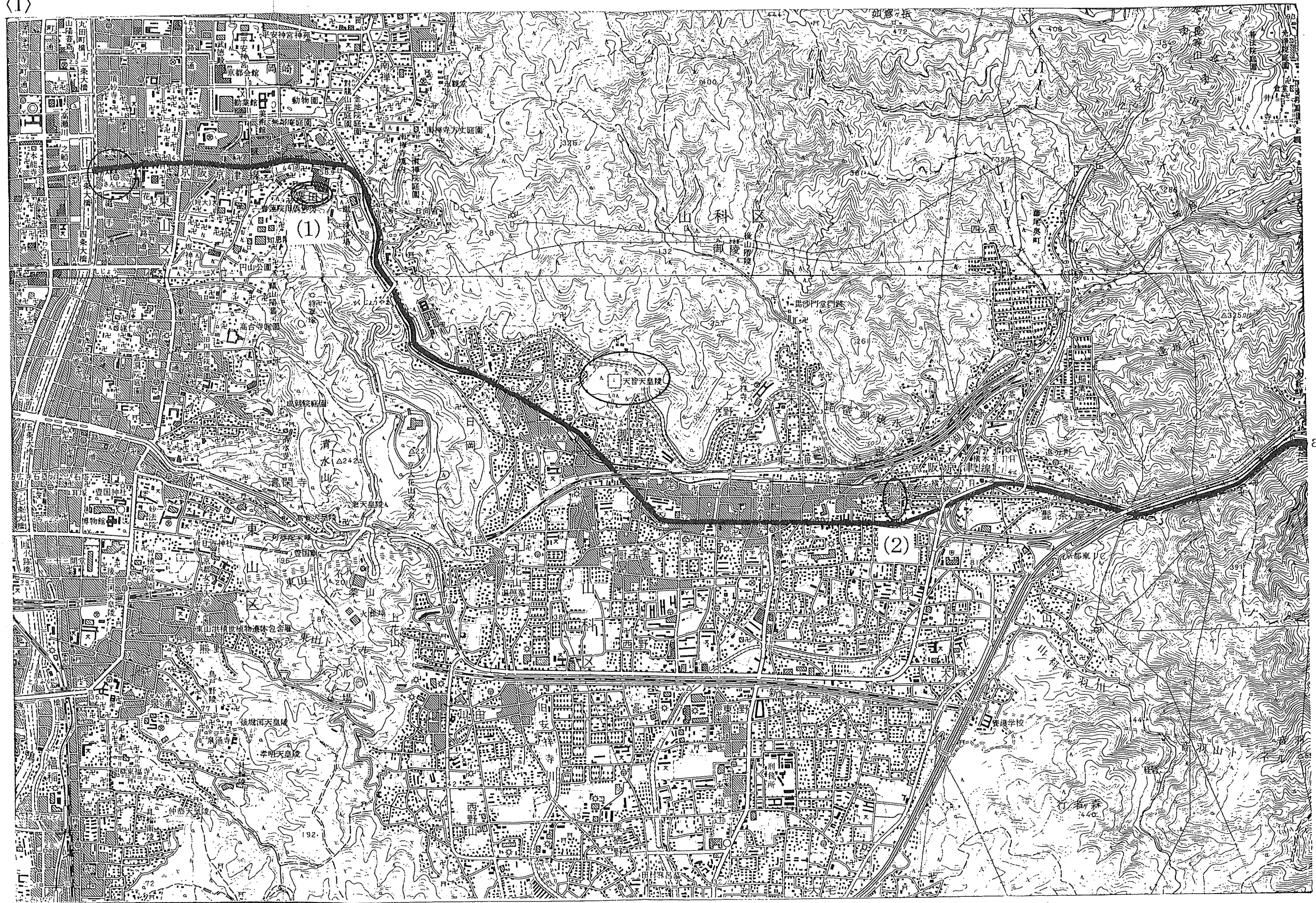
突き当たってから左折し、もう一度参宮線を横断し、右折。そのまま宮川沿いの道に進む。再度参宮線を経くぐって横断する。宮川の堤防沿いに進み、度会橋（38）を渡って伊勢市へ入る。

この道はおそらく伊勢神宮へゆく斎宮も通ったのではない。月夜見宮（37）の脇を通る。この奥が豊受大神宮、外宮（38）である。伊勢神宮と多くの末社については所功氏の『伊勢神宮』他多くの書が出ている（注1）。伊勢市駅の前を通過して近鉄宇治山田駅へ。ここが本日の終点である。予定通りの到着。事故もなく順調な旅であった。

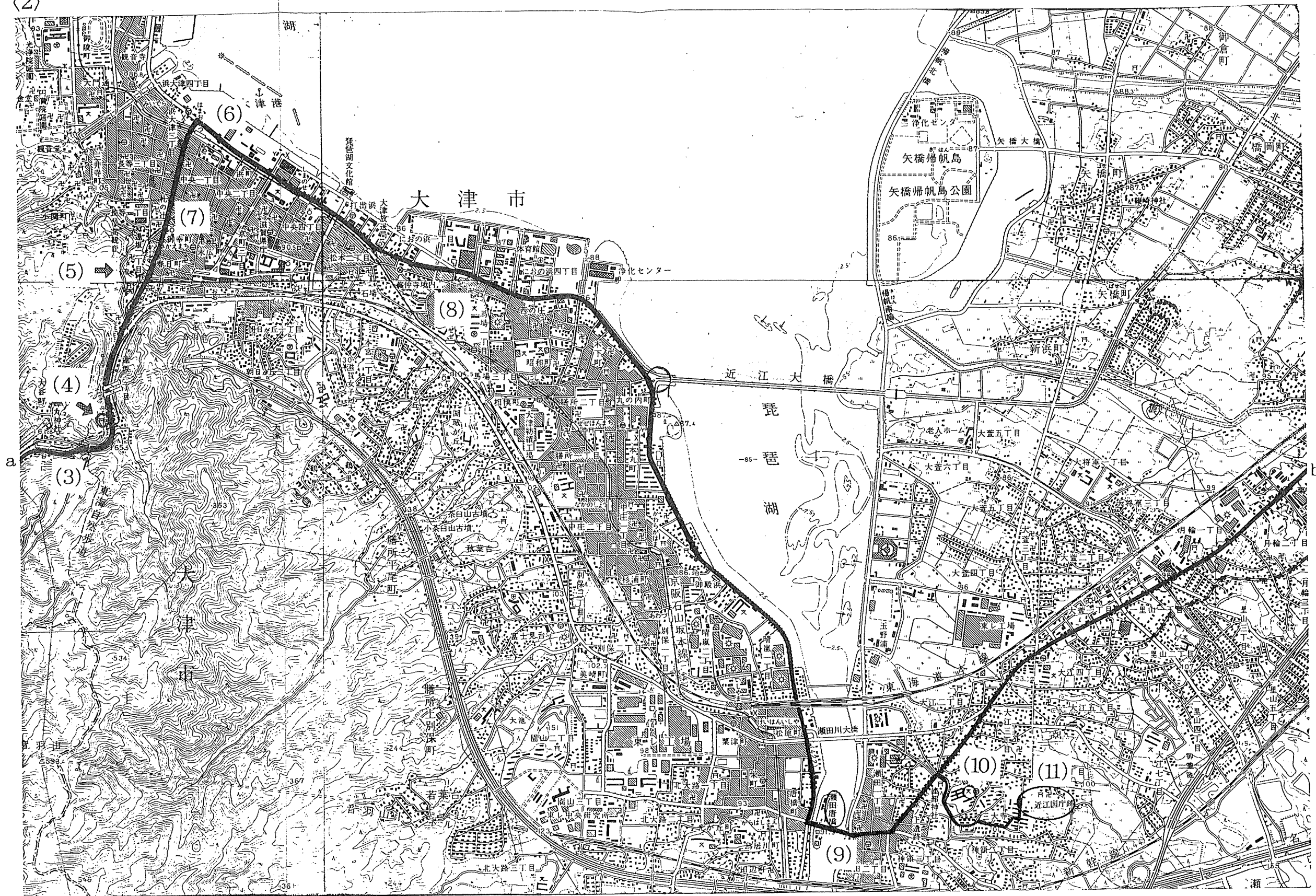
福嶋先生ほか大坂方面から参加して下さった方々とお別れする。福嶋先生にはいくらかお礼を申し上げても足りないがあまりしつこくすると却って煩がられてしまうのであとは心の中で言い続ける。

列車の時刻まで間があり、赤福を買って焼が餅、へんば餅の恨みを晴らす。以上が斎宮群行の道筋を辿る旅の全行程であった。

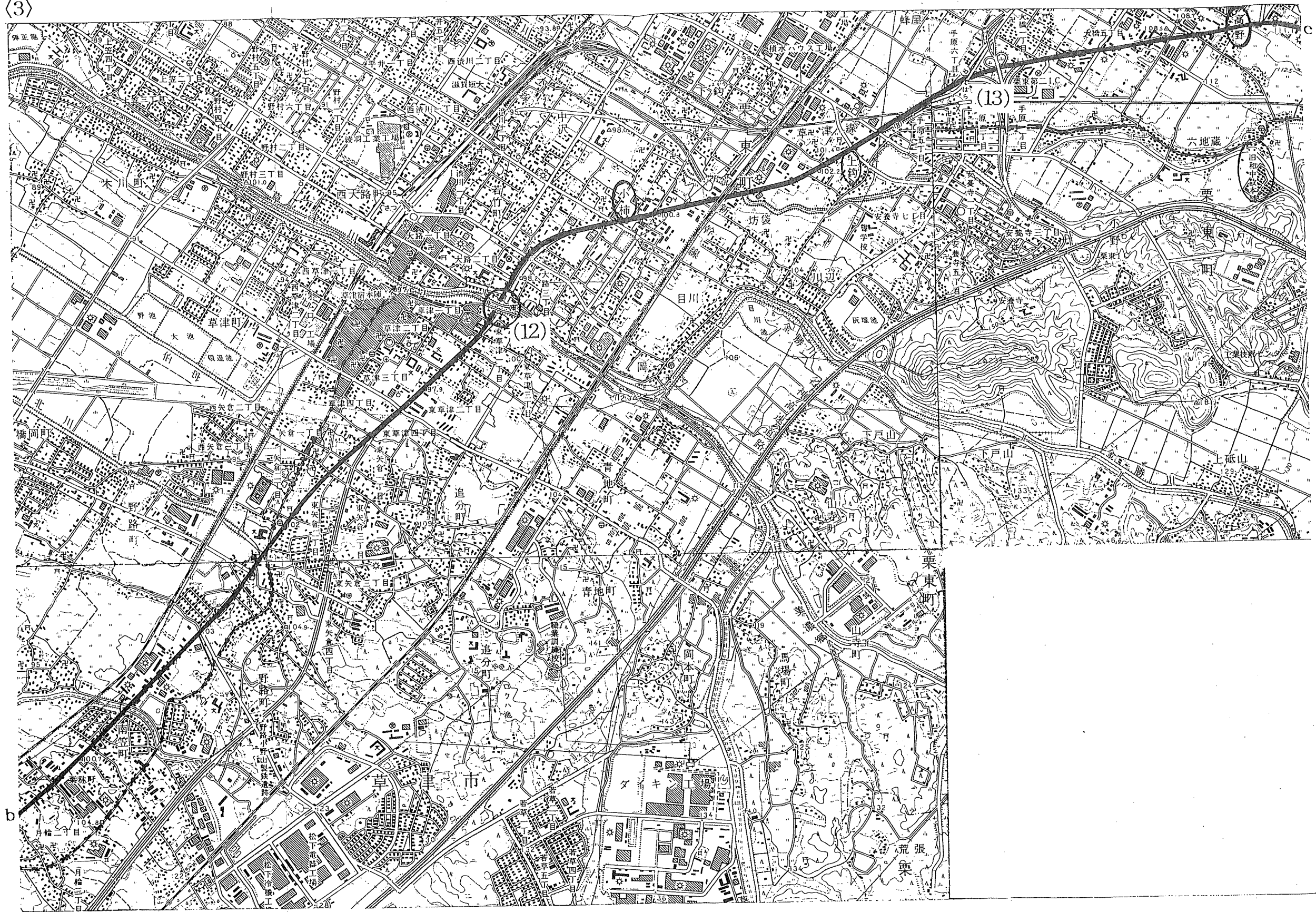




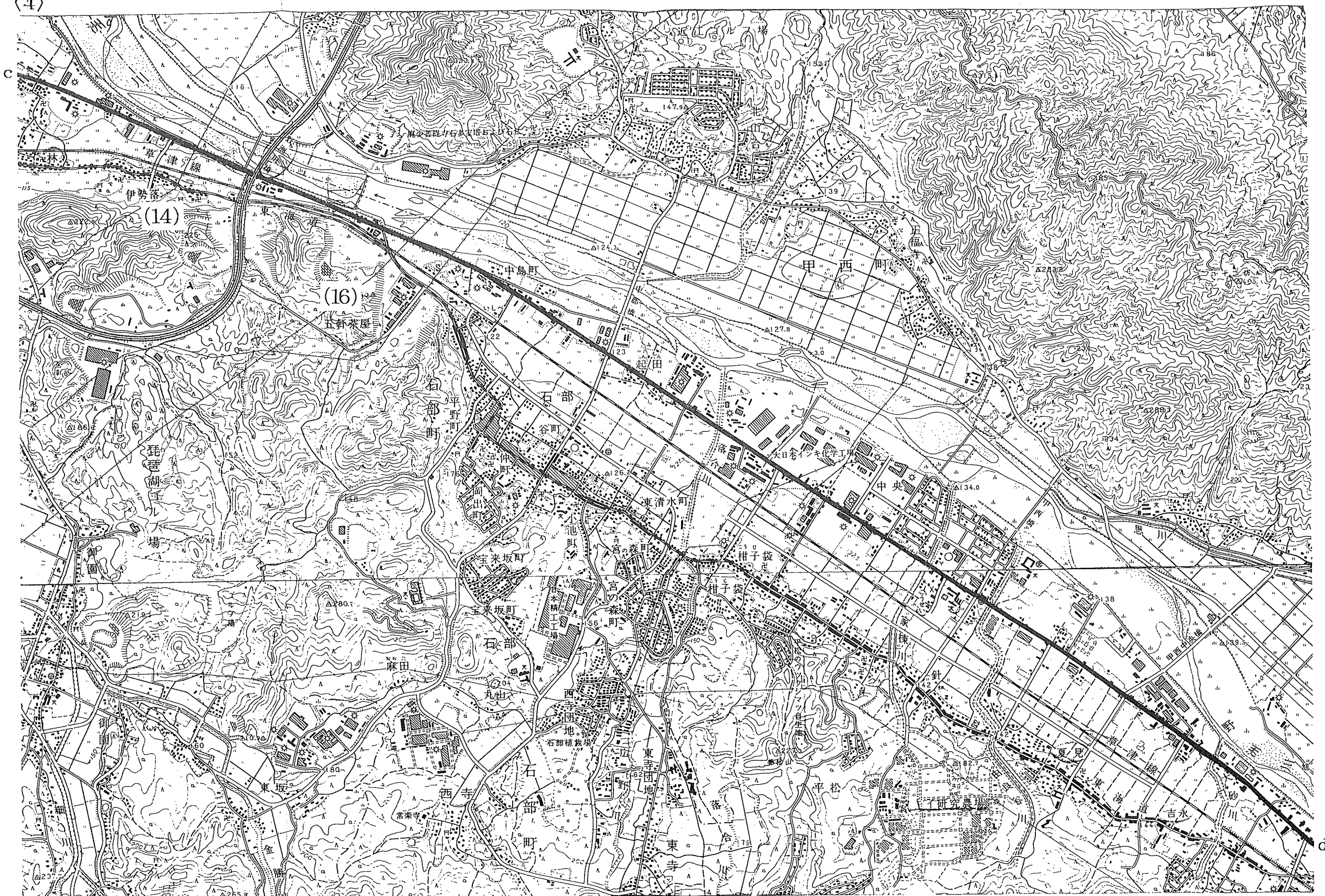
(2)





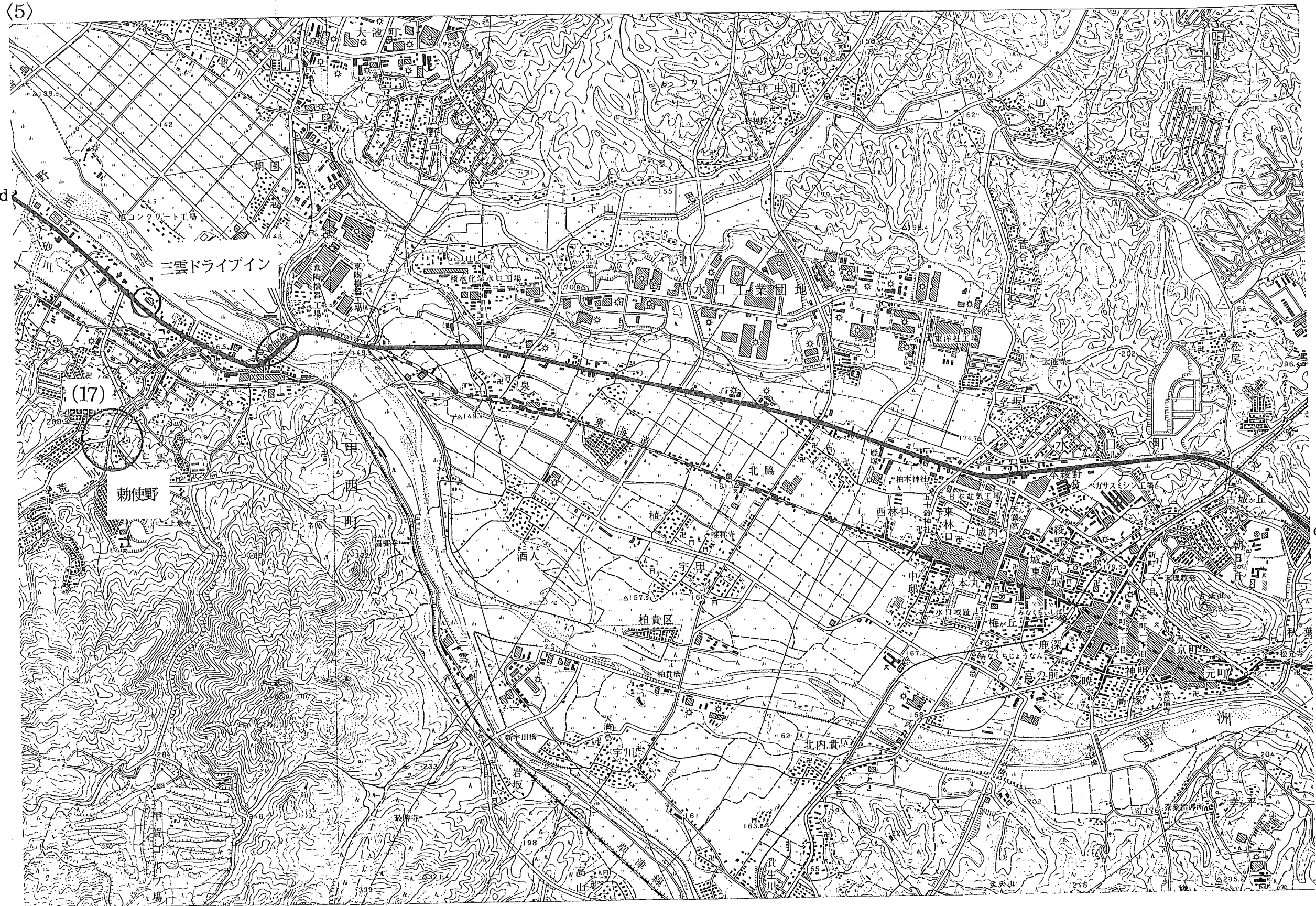


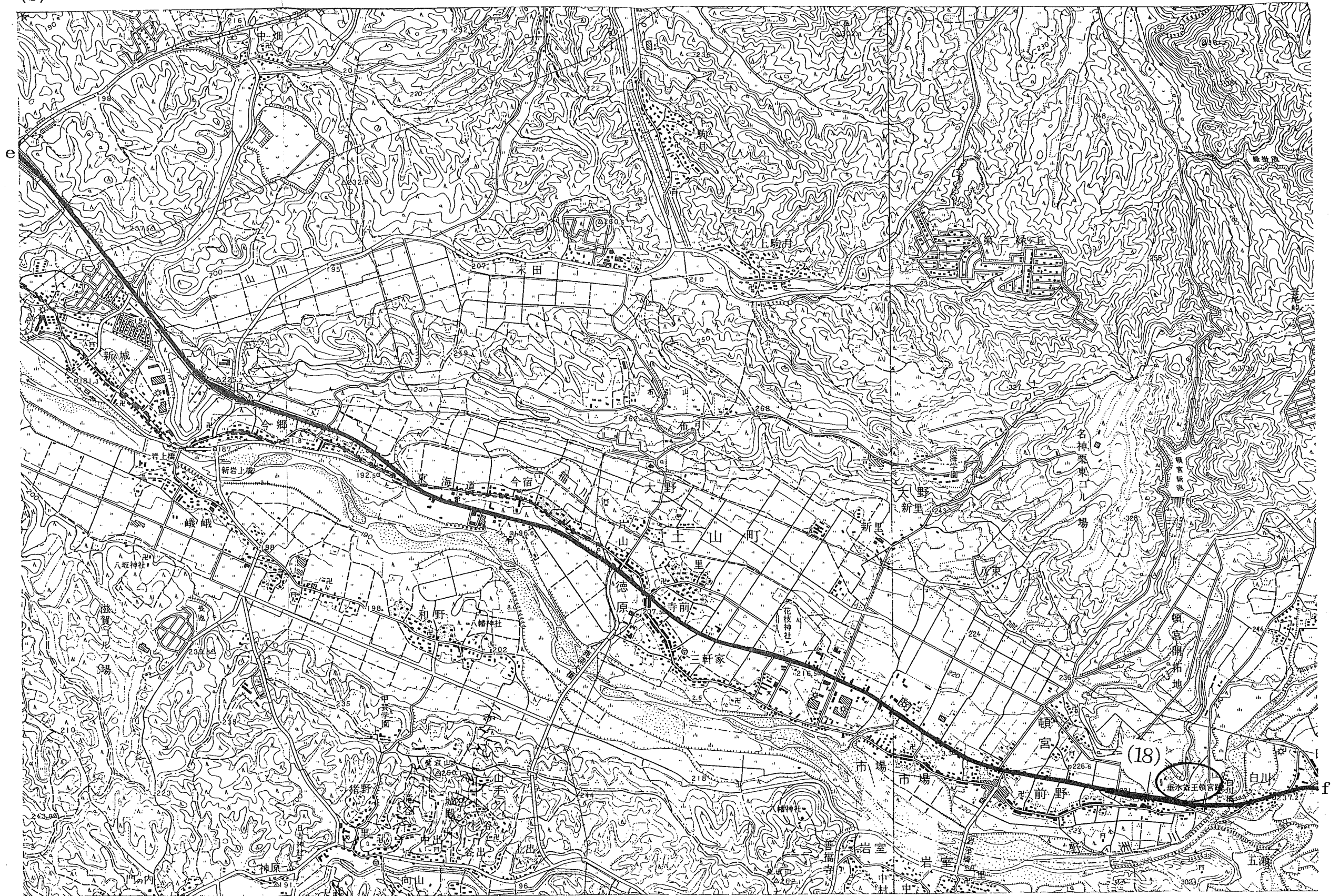
(4)



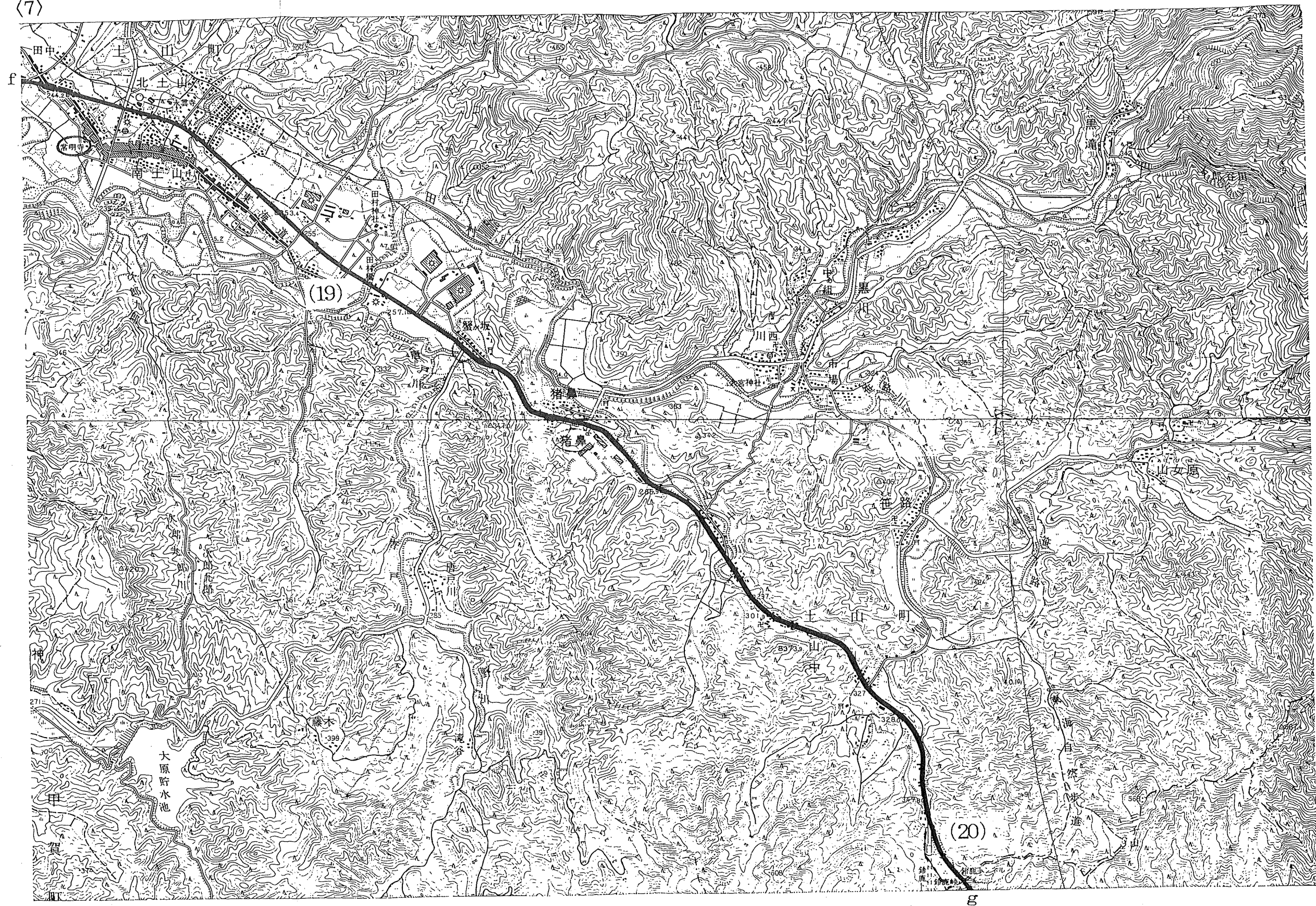


(5)

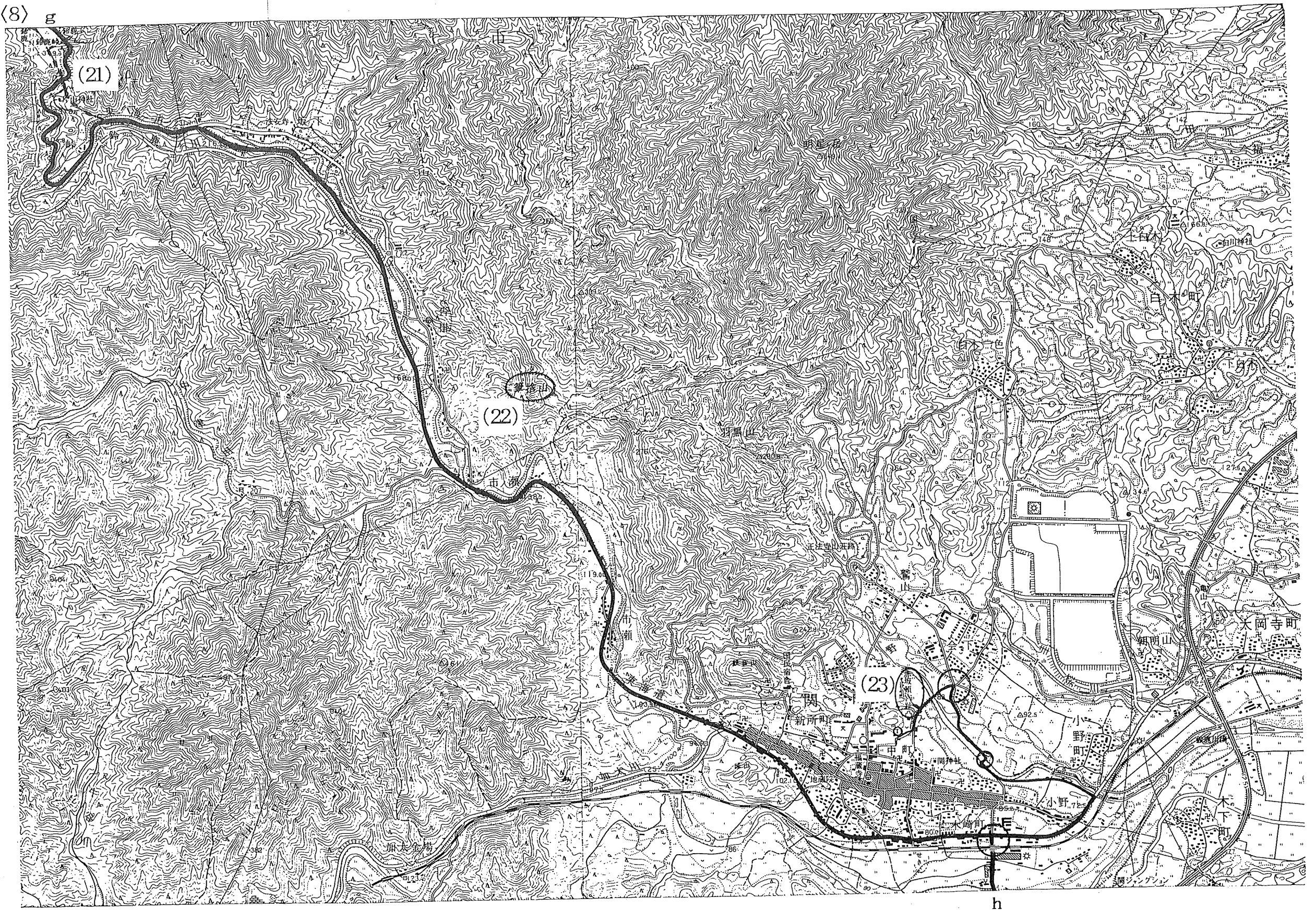








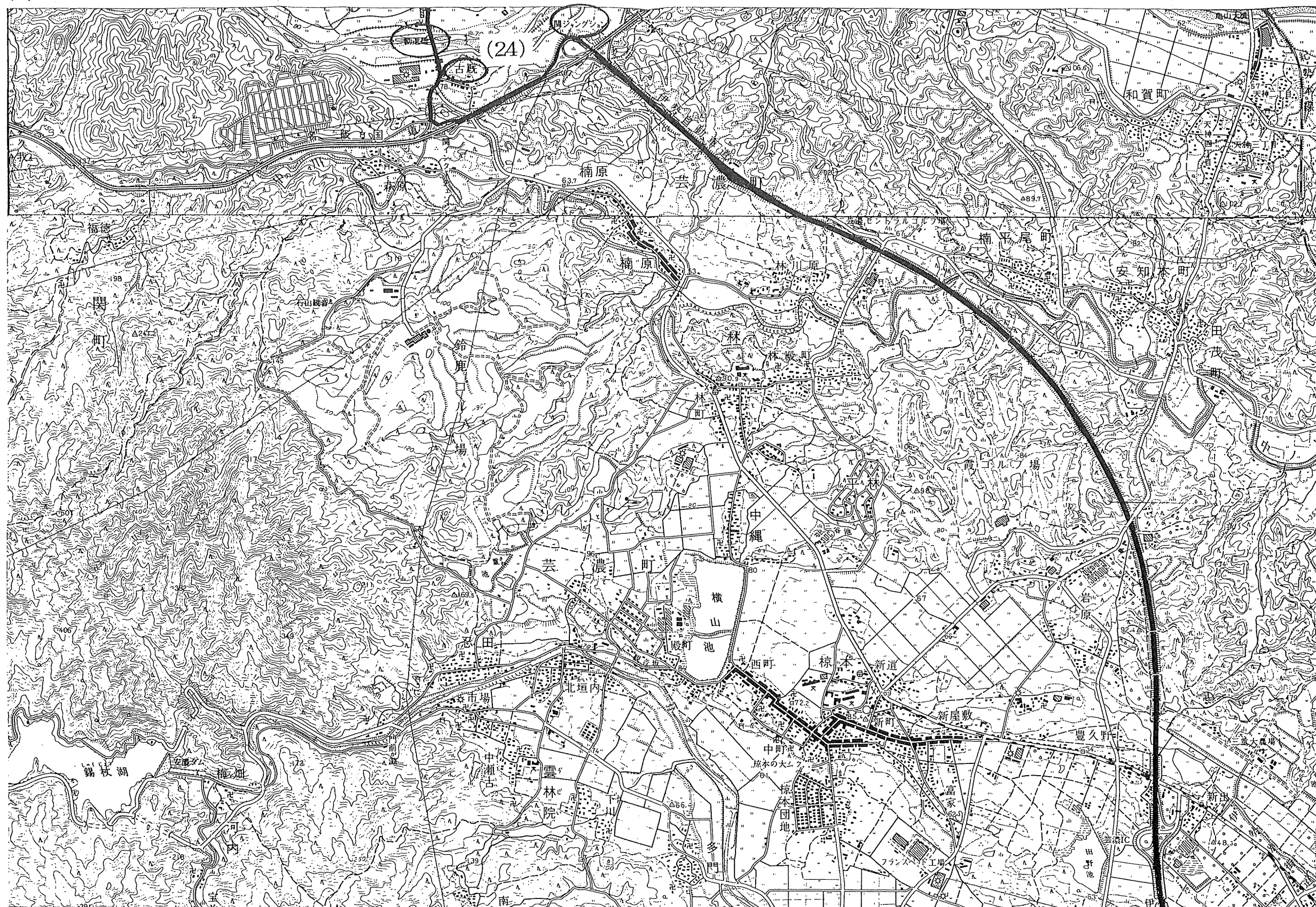






(9)

h



i

